

「漢委奴国王」^{かんわのわのこてくわう}とあり、これがこの時の印綬とされるが、奴国は博多湾に面して形成された地域国家の一つで、後漢の光武帝に朝貢して承認されたことを意味している。

それから五〇年後の永初元年（二〇七）には「倭国王帥升等」^{やまとこくおうすしやうとう}が朝貢して「生口百六十人」を献上したと同じ東夷伝倭の項に記されているが、「帥升等」とあることから帥升が盟主となっていた北部九州の幾つかの国々の代表として朝貢したものと考えられており、その代表となる国は伊都国（糸島郡付近）か末盧国（唐津市付近）と考えられている。このことは奴国の段階からさらに進んで北部九州には大きい政治的な連合関係ができていたことを考えさせる。

次に二世紀の中ごろから終わり（弥生時代後期）のことについて「倭国大乱」のことが記されている（『魏志倭人伝』『後漢書』東夷伝倭の項）が、国々が互いに攻防を繰り返して後に女王卑弥呼を立て争乱が収まったという。

卑弥呼の治める耶馬台国は、それが大和にあったのか九州にあったのか所在地をめぐり意見が分かれていて決着はみていないが、その管下には対馬国（対馬島）・一支国（奄岐島）・末盧国・伊都国・奴国など三〇近くの国があり、それらの連合したものであるが、この記事は三世紀（弥生時代後期）になって小さな「クニグニ」が大きな「クニ」へとさらに統合の進んだことを意味している。

特に卑弥呼については「婢千人をその身辺に侍らせ、ただ一人の男子が飲食を給し、女王のことばを伝えるのに居処へ出入りした。宮殿、物見楼、城柵などは厳重に設けられ、つねに兵器をもった人々がそれを守衛していた。……（卑弥呼が死んだあと）大いに塚をつくり、その径は百

余歩、殉葬された奴婢は百余人であった」（『魏志倭人伝』）と記述している。

二 京都・行橋地方の弥生時代

弥生時代に入ると、この地方の遺跡数は爆発的とも言えるまでに増加し始め、周防灘に面した海岸部から祓川・今川・長峽川などの河川沿いの河岸段丘・丘陵・台地上を中心として内陸部深くまで濃密な分布が見られるようになる。全体的には生産関係では、稲作の本格的な開始と普及を示す石包丁・石鎌・木鍬・杵・炭化米などの遺物が見られるようになり、さらに水稻栽培による生活基盤の安定から、人口の増加に伴って下稗田遺跡などに見られるような大集落が出現し、その中では母村とそれから分離していく分村の関係も見られるようになる。そしてこのような拠点集落と考えられる集落が各地域に出現してくる。

鉄斧など鉄器の出土は、この時代から鉄器が加工具として生活上の利器となり始めたことを示しているが、しかし依然として石器は使用され、石鎌（打製・磨製）・石包丁（大型も）・片刃石斧・挟入石斧・石剣・石戈・大型蛤刃石斧が出土するが、後期になると少なくなる。

また墓制も多様化し、箱式石棺・甕棺・土壙墓・木棺墓などが集落からあまり遠くない場所に集団墓の形で営まれ、墓域内にはそれに伴う祭祀遺跡も見られるようになる。

次にこれを時期的に眺めると、京都平野の弥生時代前期初頭の遺跡には長井砂丘遺跡（行橋市）があり、縄文晩期と弥生初頭をつなぐ遺跡として知られているが、夜臼式土器・板付Ⅰ式土器や朝鮮式無文土器が出土していて、周防灘に面したこの地域で最も早く稲作の開始された場所

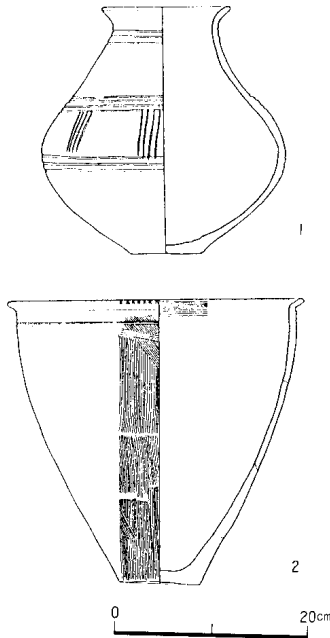
であることを推定させる遺跡である。しかし住居跡などは発見されておらず、主として箱式石棺・甕棺群からなる遺跡である。

そのあとの前期中葉では、長井遺跡のほか朝日奈遺跡（行橋市）・葛川遺跡（苅田町）などがあるが、特に葛川遺跡では、豊前地方では最初の環濠遺構が発見されたが、環濠の内側からは貯蔵穴が出土している。出土土器には瀬戸内系のものが見られ、また十七号貯蔵穴からは粟のまとまった出土があり、米以外の作物の栽培を知る資料として貴重なものとなった。

前期末より中期初めごろになると遺跡数は爆発的とも言えるように増加し、各地域に面的な広がりを見せるとともに前田山遺跡（行橋市）、下稗田遺跡（行橋市）に見られるように大規模な住居・貯蔵穴が営まれるようになり、大集落を形成するようになる。墓跡では箱式石棺墓・甕棺墓・土壙墓などが多く、墓域からは祭祀遺構も発見されている。また、竹並遺跡（行橋市）・下稗田遺跡からは畿内系の櫛描波状文土器が出土しており、畿内との交流も活発化したことを示している。

後期では、住居跡は下稗田遺跡など若干の遺跡に限られていて、実体はあまり明らかではないが、墓跡では亀田南遺跡（勝山町）・下稗田遺跡などに見られるように箱式石棺墓・石蓋土壙墓などが数多く知られている。その中でも特に上所田遺跡（勝山町）・石並遺跡（行橋市）出土の長宜子孫鏡、前田山遺跡出土の長宜子君鏡、山鹿遺跡（犀川町）出土の内行花文双獣鏡、上所田遺跡出土の鳥文鏡はそれぞれ箱式石棺墓・石蓋土壙墓から出土したものであるが、中国の後漢代や魏・晋代の舶載鏡であり、共同体の中でこのような舶載鏡を副葬するまでになった首長層の成長を考えるうえからも貴重な遺物と言えよう。また、天生田（行橋市）

第24図 葛川遺跡出土土器(一部)



1 壺 2 甕
 (苅田町教育委員会「葛川遺跡」
 苅田町文化財調査報告書第3集
 より)

の大将陣から銅矛が、馬ヶ嶽（行橋市）山中から銅戈が出土している。後期の遺跡でも平遺跡（豊津町、箱式石棺・鉄鏃・鳳鏡出土）や川ノ上遺跡（豊津町、墳丘墓）は次の古墳時代とをつなぐものとして貴重な遺跡である。（第22表、第89図参照）

三 京都・行橋地方の主な弥生時代遺跡

(一) 葛川遺跡（苅田町白川）

この地方で最初に発見された環濠遺跡。大型宅地造成に伴って昭和五十七年（一九八二）から翌年にかけて発掘調査が行われた。東西五七メートル、南北四三メートルの卵形の環濠内からは袋状貯蔵穴二七基が出土している。主として弥生前期中ごろの遺跡で、綾羅木郷遺跡（山口県下関市）出土の土器に類似するものがある。十七号貯蔵穴からは粟のまとまった出土があった。ほかには中期または中期後半の住居跡二軒、甕棺一基も出土している。（第24・25図、写真5参照）